

生涯学習情報誌

Life Learning

7 2018
Jul.
NO.335



理事長代理として教室主催者に励ましの言葉を贈る、財団事務局長・佐藤梨奈。

教室を立ち上げ、さらに 社会貢献活動をされる講師の方々に エールを贈りました



全国約300教室、6500受講者を指導した教室主催者の代表が招かれた。

財団協賛会員の(株)オールアバウトライフワークスは、5月24日、楽習フォーラムの事業報告と会員表彰のイベントを行った。同社の菱倉英一社長による事業報告では、昨年度、楽習フォーラムに約1000人が新規入会し、のべ約6500人が講座を受講、新たに始まった講座も人気があり、生涯学習の場としてますます期待されていることが報告された。

財団理事長・松田妙子の代理として出席した事務局長・佐藤梨奈がスピーチに立ち、教室を主催する講師の方々に、さらに社会貢献活動をする講師の方々に向け、称賛と励ましのエールを贈った。大森兵蔵・安仁子による有隣園の創設から、松田竹千代、松田妙子へと受け継がれてきた「Share Your happiness」の精神が財団の底流にあることを述べ、人に教えることで自分も成長する、充実した生き方を讃えた。

スピーチに対し、参加した講師や会員の方々から、「自分たちの出す資格がどういう理念のもとに認定されているのかよくわかった」「教室を続ける励みになった」「人生100年時代の生涯学習の大切さが理解できた」といった声をいただいた。

表彰では、認定者を最も出した優秀指導者賞と、新たな生徒を最も獲得した優秀教室経営賞があり、大阪府の梅沢知代さんがダブル受賞、殿堂入りが決まった。

社会活動表彰では、自治体の介護予防講座の一つとしてブローチ作りを指導する大阪府の正木ゆかりさん、福島県で地元のだんご粉を使ったデコもちの商品化に寄与した秋山仁美さん、プリザーブドフラワーなどで子どもたちの花育に取り組む山形県のも田葉津恵さん、高齢者がモデルをするファッションショーを企画・実行した愛媛県のとなかゆかりさんが受賞。多田さんが代表して表彰を受けた。

上位受賞者たちと。左から3人目がダブル1位表彰の梅沢さん。中央は、楽習フォーラム会長でブライダルファッションデザイナーの桂由美先生。



懇親会にてオールアバウトライフワークス・江幡会長が桂由美先生と対談。「教室主催は女性の活躍の場、ぜひ続けて」と桂先生。



社会活動表彰を受けた多田さん(左)と菱倉社長。



出席した優秀指導者、優秀教室経営、プリマ会員ら全員と。

鬼の学び②

作家／出版プロデューサー／劇団主宰

鬼塚忠のアンテナエッセイ

私は今インドネシアのバリ島にいる。

そう言うと、うらやましいという声が聞こえてきそうだが、そういうわけでもない。尻に火がついている状態なのだ。強引にでも、東京から離れないと仕事をこなせなくなった。

たった7人の会社でも、経営していると日々雑多な仕事が多い。出なければならぬ会議の他に、社員が破裂しそうな爆弾を抱えてきたり、突然の打ち合わせが入ったりで、集中して文章を書く時間がまったく取れないのだ。今年の10月にはシェークスピアの戯曲を翻訳し、小説化して出版する。他にも12月に催される舞台の構成を練って脚本を書かねばいけないし、更に来年には明治維新の猿楽町を舞台にした時代小説の出版も控えている。もちろん本誌7月号の原稿も疎かにはしない。もっか時間の確保が必要なのだ。というわけで、執筆するために日本を抜け出てきたわけである。

旅をしようと思うのは、旅こそ学びであるということだ。最近、大学からお誘いを受け、学生を前に話すことが多い。大学生には「旅をしる」と強く言う。学校で机に座って話を聞くより、旅に出る方が学びが多い。私は大学の在学中に世界中を10数カ国放浪し、大学を卒業してから就職せず、40数カ国を3年間ほどかけて旅した。正直、幼稚園から大学まで20年近く机上で学んだことよりも、旅先で学んだことのほうが多いと思っている。世

旅は学び？

界中の文化を見て、考え方を知る。そうすると外から日本を考える。結果、思考の幅が広がる。

旅をして得られる一番のものは、世界中のひとと議論する機会だ。今日は6月15日。宿には、世界中から来た若者の長期滞在者が多く、彼らと話す、予想通りロシアワールドカップと、トランプと金正恩との対談が2大トピックだ。しかし同時に、日本に関心が向いているのを肌で感じる。

日本について尋ねると、初めは「歴史がある」「礼儀正しい」「ポップだ」など耳障りのいいことしか言わない。しかしだ。話し込むと案外否定的な言葉も出てくる。あるドイツ人の青年が日本について「日本は、礼儀正しくいい国だが、衰退に向かっていくと聞く。一番の問題は急激な人口減少にある」と言った。するとカナダ系中国人が言った。「日本は確かに自由主義だけど、目の前にある小さな問題のひとつも解決できない。中国は、独裁主義という問題はあるけれど、子供が多いと思えば一人っ子政策。少ないと思えばまた逆の政策を取る。程度の問題はあるが、重要な問題が解決するなら強引さも悪くない」。まさしくその通り。日本の目の前には、かなり深刻な問題が立ち塞がっているのに、政府は何も出来ないでいる。こんなときこそ、視点をぐいっとほかに引いて見たほうがいい。

人口減少のことを考えると、いつもバッファローのことを思う。バッファローというとアメリカ大陸の野牛だが、実はヨーロッパにもポーランドの北部に生息する。アメリカのバッファローは個体数が多く、管理など出来ないで、野放しの状態。狼の群れも同じ場所に生息し

ていて餌食にあうこともある。人が護るわけでもなく成り行く自然の摂理に任せている。

一方、ポーランドのバッファローは違う。ヨーロッパに少数しか棲まないのだからと大切にされている。餌のない冬の時期には森のあちこちに置かれている餌箱に、人間が餌を補充する。さらには、北米大陸のバッファローと違って、天敵の狼がいない。こうなれば、ねずみ算式に繁殖してもいいようなものだが、実際は逆で、個体数は着実に減っている。専門家によると、食べ物の心配もない、天敵もない、ということは、逆に生きる力を奪うのだそう。

人も同じなのだ。父の話を思い出す。父は9人兄弟の6番目だった。父に、なぜそんな大家族だったのか？と聞いた答えは、「戦争が起きているから、いつ戦争に駆り出されるかわからないだろ。だから9人のうち半分戦死しても4人か5人は残る。あの頃は食べるものがなく、餓死もあったから、さらに生き残れない。9人くらい産まない家が途絶えるだろう」というものだった。その話を聞いたときは、戦争の恐さを感じなかったが、今思い返すと、生きることには負荷がかからないと人口は増えないというのは正論かもしれない。もちろん戦争を肯定などしないが。

この話は、サッカー日本代表育成の議論にも似ている。サッカーでプロになり、日本代表に入るにはふたつの道がある。ひとつは、Jリーグの下部組織のクラブに入って進む道と、もうひとつは学校の部活でサッカーを続け、卒業後プロに入る道。ざっくり言うと、前者はライセンスを持つコーチが理にかなった合理的な練習をする。後者は、もちろん試合に勝つための練習はするものの、先輩の理不尽ないびりにあったり、コーチのきまぐれとしか思えない無謀な特訓が始まったりする。理屈で考えれば前者のクラブチームから優秀な選手が出てきそうだが

● 著者プロフィール

鬼塚忠(おにつか ただし) 1965年鹿児島市生まれ。鹿児島大学卒業。大学卒業後、2年間かけて、アジア・オセアニア、中近東、アフリカ、ヨーロッパなど世界40か国を放浪。ヨーロッパでお金が底をつき、シベリア鉄道で帰国。帰国時、所持金は1万円を切っていた。1997年より2001年6月まで海外書籍の権威エージェン会社「イングリッシュ・エージェンシー」に勤務。映画の原作、ビジネス書、スポーツ関連書籍など年間60点ほどの翻訳書籍を手掛ける。次に海外の作家ではなく、日本人作家のエージェントをしたいと思い、2001年10月にアップルシード・エージェンシーを設立。現在では作家のエージェント会社の経営者であるとともに、作家、脚本家、劇団もしも主宰でもある。著書『風の色』(講談社)2018年映画化。『花戦さ』(角川書店)2017年映画化。日本アカデミー賞優秀作品賞受賞。『Little DJ』(ポプラ社)2007年映画化。『カルテット!』(河出書房新社)2012年映画化。『海峡を渡るバイオリン』(河出書房新社)2004年フジテレビ45周年記念ドラマ化。文化庁芸術祭優秀賞受賞。『恋文讃歌』(河出書房新社)、『僕たちのプレイボール』(幻冬舎)2012年映画化など多数。



● 村上春樹「遠い太鼓」(講談社)

40歳になろうとしている著者が、ギリシャ・イタリアを旅しながら、「ノルウェイの森」「ダンス・ダンス・ダンス」を書きながら綴った旅エッセイ。



● 司馬遼太郎「アメリカ素描」(新潮社)

司馬遼太郎氏がはじめて、人工的に出来たアメリカに行った際に感じたことを書いた雑文。



● 藤原新也「インド放浪」(朝日新聞出版)

不思議な感覚を持つ著者がインドを旅して思ったことを綴った旅エッセイ。



↑インドネシアの棚田で農夫と写真を撮ってみる。



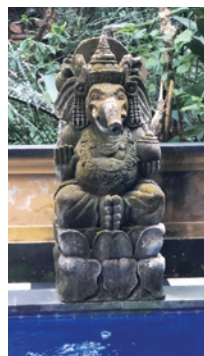
→コーヒーを売りにきた青年。インドネシアはコーヒーの産地だったことを思い出す。



↑→インドネシアのケチャダンスの最中。踊り手はトランス状態に入る。



↑この水牛で棚田を耕すのだ。



←インドネシア全体は大多数がイスラム教徒だがバリ島だけはヒンズー教徒が多数を占める。どういう経緯でそうなったのか? その時どういう思いでいたのか? を考えるのが学び。写真はガネーシャ。ヒンズーの神。

が、日本代表の多くは、後者の部活上がりが多い。それは何故か。後者はサッカーを続けるためにかなり負荷がかかっているからとしか説明付けられない。

このように、旅に出ると余裕ができ、日本人と思考の違う外国人たちと議論ができるだけでなく、過去に聞いたこと、読んだことを記憶の引き出しから引き出しやすくなる。ストレッチをして手足の稼働領域が広がって気持ちよくなるように、思考が広くなったようでこれまた気持ちよくなる。そして、その巡る思索を、このように文章に書き起こすと、それまた楽しく、最高の学びとなる。

生涯学習とは、生涯旅に出続け、感じ、考え、思索を巡らすことだと思ふのだ。そして、できるなら、交わした議論、巡らした思索を文章にし、世間に公開してみたいかがだろうか? その場合、いいのはブログだろう。既知の知人だけに読まないSNSだとあまりにつまらない。

机上で本を読んだり、権威のある先生方の話を聞いたるだけでは、あまりにも浅すぎるし、つまらなさすぎる。

最後に、私の中で、旅の思索を綴った良書を紹介したい。

パーキンソン病患者が運動継続できる『PD Cafe』 支える社会から共に創る社会へ

「ソーシャルビジネスグランプリ2018」でグランプリに輝いた小川順也さん。理学療法士として勤務した病院

は神経難病専門で、最も多かったのが、パーキンソン病患者。入院して1か月のリハビリプログラムを終えた患者は、動きが良くなって退院するが、また症状が悪くなり戻ってくる。何人かの患者さんに意見を聞くと、「気軽に運動を続けられる場がない」「医療保険の対象にならない」といった、院外での悩みは多く、自分自身や医療制度の限界を感じた。

患者は病気の専門家

そのころ出会った「I have a cancer」「私はがんを持っています」という言葉。「I am a cancer」「私はがんです」とは違い、患者は1人の人間で、その人がたまたまがんを持っているという表現。チーム医療と言いながら、患者やその家族がチームに入っていないのではないのか。自身の病気のことを誰よりも知っ

ている患者も含めてチームを作り、共に歩むことが重要だと考えた。

課題解決し合えるコミュニティ

2013年に、仲間や患者さんと立ち上げたのが、PD Cafe (Parkinson Disease Cafe)。パーキンソン病の当事者と共に作る、運動がメインだが、情報共有、仲間づくりの場でもある。グループワークでは、患者自身の特技や体験を活かして、各人が自宅で工夫しているこ

となどを発表し合う。患者が講師をするヴォイストレーニングの講座や、若い患者たちによる集いなどが自然発生。共有して、お互いが課題を解決していけるコミュニティができていった。

PD Cafeでは定例の運動教室も情



合宿プログラムにて



小川順也氏



リハビリジム



定例運動教室

理学療法士になったきっかけは、祖母が脳梗塞になり体が不自由になったこと。2011年～2015年まで、神経難病専門の国立精神・神経医療研究センターでパーキンソン病患者を担当。2013年に東京都小平市で最初のPD Cafeを始めた。2017年に合同会社Smile Spaceの共同代表に就任。「難病であっても一人で悩まずに仲間と話してみませんか。まずはお気軽にご相談ください」とのこと。

■連絡先

Mail : info@the-smile-space.com

リハビリの必要ない社会？

報交換の場を中心に、3つの事業を展開する。1つは、身体機能をチェックし、ヴォイストレーニング、鍼灸、ピラティスなど、それぞれにあった機能訓練を提供するリハビリジム。2つめは、専門家の教育。アメリカで開発された運動療法プログラムによって、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士を年間200人ほど育成する。その受講者を対象にした運動ファシリテーション講座を3つめの事業として準備。それらにより、パーキンソン病患者の「場」を拡大していく。

グランプリ受賞によりビジョンが明確になったという。患者の声を蓄積・発信するためのデータベース化も検討中だ。「PD Cafeは、全国7拠点にまで広がっています。運動という軸があること。そして一方的に指導されるのではなく、患者も講師も医療従事者もいっしょにつくる、コミュニティになっていることが特徴です。リハビリテーションとは、本来は機能訓練ではなく『復権』の意味。誰かが誰かを支えるのではなく、共に歩む社会を目指しています」

シリーズ

社会起業家

合同会社Smile Space 共同代表

小川順也氏に聴く